
闘魂勇者ガイ

蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘魂勇者ガイ

【Nコード】

N4447Q

【作者名】

蛇

【あらすじ】

熱き魂をもつ勇者ここに参上！

(前書き)

思いつままに書いた

ミッドチルダ 第四陸士訓練校

ここに一人熱い、いや熱苦しい男がいた

「うおおおおお！」

戦闘訓練の時間。周りで他の訓練生達が実戦形式の訓練に励むなか一人すごい勢いで指立てをする男がいた。

彼の名はガイ・サイゴウ。顔はいいが性格が熱すぎる男である

「ねっけつううううう！」

彼がなぜ一人で指立てをしているのか。それは彼がじゅっぶん強いからである。強いといっても別に彼は特別な能力はもっていないし、なにより彼は魔導師としての才能がまったくない。それでも彼は魔導師に勝ってきた

「おいガイ、今日の訓練は終わりだぞ」

「ちょっと待つてください教官！あともう少ししたら終わりますので！」「はあ、すきにしろ」

教官は少し呆れた様子でガイから離れていく

ガイから離れたところで二人の少女が話をしている

「サイゴウのやつもよくやるわよね」

「アハハ、どこからあんな元気であるんだろうね」

「うおおおおお！熱血！闘魂！」

「はあ、熱苦しい。いくわよスバル」

「あ、まってよティア！」

二人は訓練場をでていった。残ったのは

「うらららららあ！」

ひたすらに筋トレを続けるガイだけであった

そんなガイを見ている者がいた

「見つけた。あの男なら私の力を使いこなせる。早速融合してしまおう」

「む？」

ガイがふと前を見ると発光している物体がすごいスピードで近づいてきたていた。ガイはそれを

「ふん！」

よけた

その後しばらくの間ガイは光る物体をよけつつづけていた

「はあはあはあ、いい加減おとなしくしやがれ！」

「だが断る！」

そんなことをしばらく続けていると

「ガイ！いつまでトレーニングしてるつもりだ！」

「む？」

「隙ありいいい！」

「しまった！」

ガイと光る物体はぶつかり、ガイはそのまま気を失った

「む、ここは？」

ガイは真つ暗な空間にいた

「はあはあやつと融合できた」

目の前には先程死闘を繰り広げた光る物体がいた

「おいここはどこだ」

「ああ、目を覚ましたか。ここはお前の精神の世界だ」

「精神の世界だと？ いったいお前はなんだ？」

「俺はヒート星人。宇宙警察の刑事だ」

「ヒート星人？ 宇宙警察？」

「俺達宇宙警察は宇宙の治安を守るために活動している。そしてこの世界に凶悪な宇宙人が潜伏していることが判明した」

「凶悪な宇宙人？」

「奴らの名はフロスト星人。あらゆるものを凍てつかせる宇宙人だ。俺は奴らを捕まえるためにこの世界にやってきた。しかし私達はなにかと融合しないと力を発揮できない。そこでだ君の力を貸してほしい」

「いいぞ！」

「だろうな、最初は誰でも戸惑う……いいの!？」

「ああよくわからんが困っているのだろう？サイゴウ家家訓その三、困ってる人を見捨ててはならない、積極的に助けるべし!だ。お前が困っているならそれを助ける!それだけだ！」

「ありがたい……協力を感謝する！」

「で、そのフロスト星人はなにが目的でここにきたんだ？」

「奴らの目的はこの世界の女を全て凍らせ人間を根絶やしにするつもりだ」

「女を？」

「ああ、とりあえず明日から行動してもらおう」

「おう！」

翌日 訓練場

「しかし女か……」
とりあえず訓練校の女子を見つめるガイ

「サイゴウのやつなんでこっち見てるのかしら？というかスバル遅いわね、なにやってんのかしら？」

「ランスターさん」

「え？」

「おまたせしましたランスターさん」

「スバルあんた急にどうしたのよ！」

「どうかしましたか？ランスターさん」

「ん？なんかあの二人様子がおかしいな」

「あれは……あの青髪の女、フロスト星人に心を凍らせているぞ！」

「なに!？」

「はやく溶かさないと全身が凍り付くぞ！」

「だがどうやって溶かすんだ？」

「キスだ！」

「よし!…….…….なんだと？」

「だからキスだ！」

「む、無理だ！サイゴウ家家訓その五キスは将来の伴侶となるものにだけするべし！そんな軽々しくできるか！」

「キスでお前の心の炎を相手にうつすんだ！言っておくが口限定だぞ」

「なお無理だわ！」

「はやくしないとあの女が凍り付くぞ！」

「くう、こうなったらやけだ！」

ガイはスバルに近づき

「ナカジマ！」

「はい？《チュッ》！？」
キスをした

「あ、あんたスバルになにしてんのよ！」

「父上、母上、申しわけありません。いいつけをやぶってしまいました」

「ちょっと聞いてんの！？」

「ティア落ち着いて」

「これが落ち着けるわけ……え？スバル？」

「どうしたの？」

「今あんたティアって……もとに戻ったの？」

「うん、サイゴウ君のキスのおかげかな？」

「ふむ、どうやら無事溶けたようだな」

『ちっ！計画を邪魔しやがって』

「む、その声はフロスト星人か！」

『なるほどヒート星人と融合していたのか。どうりで溶かすことができたわけだ』

すると訓練場が凍り付きフロスト星人が姿をあらわした

「な、なんなのよあいつ」

「あれがフロスト星人・・・」

「ガイ、やつを倒すぞ！ヒートスターをコールしろ！」

「昨日言ってたやつだな、わかった！コール、ヒートスター！」

ガイがコールするとどこからともなくパトカーが走ってきた

「いくぜ融合！」

ガイの声とともにパトカーが人型ロボットに変形しそれにガイが融合する

「勇者ガイ！参上！」

『ふん、ならこちらはこうさせてもらおう！』

フロスト星人は氷の恐竜へと姿を変えた

「なんなのこの状況？」

「サイゴウ君ガンバレー」

「おらあ！」

ガイがフロスト星人にパンチを放つが

『ふん』

尻尾ではじき飛ばされる

「くっ！まだまだあ！」

すぐに立ち上がり反撃しようとするが

『無駄だ』

今度は体当たりにより吹っ飛ばされる

「ぐわっ！」

『ふん、そのまま凍らせてくれるわ』

氷の息でガイを凍らせていくフロスト星人

「くう、負けて、たまるかー！」

ガイを炎が包み込み訓練場の氷が溶けていく

『なに！？』

「コール！ヒートフェニックス！」

ガイのコールにより炎の不死鳥があらわれる

「な！あれはヒートフェニックス！まだ教えていないはずなのになぜ？」

「うおおおおお！闘魂合体！」

ヒートフェニックスがばらばらになりガイに鎧のように合体していく

「闘魂勇者！ヒートガイ！参上！」

『な、なんだこの炎の熱さは！？人間のだせる炎ではないぞ！』

「はああああ！ヒートソード！火炎切り！」

『グワアアア！』

「闘魂！熱血！勝利！」
ガイはフロスト星人を倒した

「ねえサイゴウ君の家ってキスした人と結婚しなきゃならないんだよね？」

「そ、そうだが」

「私と結婚するの？」

「そ、それは」

「私サイゴウ君となら……」

「へ？」

「ちょっとスバル！？」

(後書き)

気が向けば連載するかも
感想お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447q/>

闘魂勇者ガイ

2011年10月7日09時37分発行